九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

リツ・サンハーラ（承前）

小野島，行忍

https://doi.org/10.15017/2557071

出版情報：文學研究. 13, pp.78-92, 1935-10-20. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

リツ・サンハーラ（承前）

小野島行忍譯

V　寒（九〇）

一

垂り穂の堆（ほ）もうらぐはしく
いづこか栖（す）める鳴のさへづり風情そへ
愛神（カーマ）（九一）さきはひ女のこのめる寒（シシラ）てふ時を
むかも（九二）美しきひとよ聞け

（九〇）寒季（Śiśira）は舊暦の十一月十六日より一月十五日までなり。

（九一）Kāma は「愛欲」の意にして愛の神の名なり。こゝにては愛神すなはち情慾なり。

（九二）「向股うつくしき人よ」とは作者が此の詩のきゝてなる女に呼びかけて云へるなり。

二

このときや
窓とざしたる家のうち
火と日の光おもたき衣
うらわかき女はひとの
怡逸（たのしみ）となる

三

素影かとすゞしき梅檀も
あきの月きよき平屋頂も
霜こゞりてつめたき風も
いまは人の心を悦ばせず

四

しもむすぼれ降りてさむく
月の光にいよゝ冷くせられ
青白き銀河なゝめに美しき
夜々もひとにたのしまれず

五

檳榔子を口なぐさみ
あぶらぬり華鬘つけ
蓮のかほは怡悦しき
美酒もてかぐはしく
憧れまどへる婀女は
いみじく伽羅の香に
にほへる閨屋に入る

六

(四一)まさなごと爲してせつに罵られ慄き
懼に心も空なる夫のいひ寄るをみて
愛悦そゝられし妻はとがをわすれつ

(九三)雨一一・參照。

七

情こまやかなる若人に
小夜ふけて長時いらなけく悅ばされ
疲れにむね惱めるうらわかき婇女は
しのゝめ靜かに逍遙ふ

八

奶房うつくしき肌衣をまとひ
むね紅の絹裝ひしたをやめは
ほとりに花を挿したる髮もて
寒さのきたるを飾るがごとし

九

洎芙蘭(九四)の色の黃に映え
心嬉しくもてあそばれ
うらわかき溫味のある
よろしめの奶ぶさもて
むね押着られし愛人は
寒さもものかはと睡る

（九四）kunikuma（さふらん）は色化粧料として用ゐらる。

一〇

かぐはしき息差に搖ぐ
青蓮のごとく怡悅しく
よく世心をよびおこし
ほれ〳〵さする美酒を
身の毛よだてる婇女(九五)は
いとしをと夜半に酌む

（九五）hṛṣṭa とは嬉しさに身の毛よだてるを云ふ。

一一

愛神（マダ・ラーガ（九六））さり奶くび夫の抱緊に
繁凝らせられしある若女は
いとしきひとに樂しまれし
その肌身ながめ微笑みつゝ
夙（つと）に閨屋（つまや）（九五）より他の家に行く

（九六）Mada-rāga は「情染」の意にして愛の神 Kāma の異名なり。こゝにては愛神すなはち情慾なり。

一二

また脛（はく）腹よかにして腰上（こしのへ）ほそく
艶（えん）にうつくしき或るいとしめは

リッ・サンハーラ

伽羅のよき香ににほひ華鬘とけ
毛うら渦なす結髪（むすびかみ）はらゝかして
夜明ふしどを去る

一三

水に漱ぎしばかりに金蓮の
美しさもてるビムバ（八）の朱口（くち）
耳坡（みゝもと）にかゝる（九七）淡紅（うすべに）の眶（まぶち）の目
肩にまつはる髪もて若女（わかきめ）は
いまやあかつき家のま中に
吉祥天（シュリー）（九八）のごとくにぞ立てる

（九七）śravaṇa-taṭa-niṣikta（耳坡にかゝれる）とはその背が耳朶にちかき位なゝめに大いなる眼のさまを云ふ。

（九八）Śrī は「美」または「榮」の意にして Lakṣmī（吉祥天）の異名なり、この女神は Viṣṇu（毘紐天）の妃にして美と福との神なり。

（九九）abhimata（欲せられし）とは女の唾が男にすはれしを云ふ（冬一三・參照）。

一四

またふくよかなる脂重に
おされて腰すこしたわみ
奈ぶさのおもみに弱りて
しづ〳〵歩むある郎女は
婿ふさの夜の衣とく脱し
晝に相應しき裝ひをなす

一五

若女はほとり爪痕にみてる奈くびを眺め
齒にやぶられし花芽めく唇端てまさぐり
こゝなる津液の欲せられ（九九）しを嬉しみつゝ
眞日のぼるときしも顏つくりす

一六

おほくの糖塊をいだし
あまき米と甘蔗もて怡悅しく
祕戯いらなけく愛神の慢成り（一〇〇）
いとしき人に離れ居る婬女の
むねこがす因なるこの寒時は（九〇）
おんみらの幸のため恒にあれ

（一〇〇）Kandarpa は「放縱」の意にして愛の神 Kāma の異名なり。こゝにては愛神すなはち情慾にして「愛神の慢」とは情慾の熾盛なるを云ふ。

VI 春（一〇一）

一

(一〇二)いとしきひとよ春士愛神(ヴァサンタ・コーダ)は
赫く檬菓(まんごー)の芽を鋭き矢とし
蜂の列(つら)を煌く弓づるとして
たはむれに泥(なづ)める人の心を
射にぞ來ぬる

(一〇一)春(Vasanta)は舊曆の一月十六日より三月十五日までなり。

(一〇二)Vasanta-yodha は「春の戰士」の意にして愛の神 Kāma の異名なり。

二

(一〇三)いとしきひとよ春たつや
樹々は花さき水に蓮開き
をんなあだめき風かをり
ゆふべ怡悅(うらぐは)しく晝美しく
ものなべて彌々(いとど)なつかし

三

いけみづの愛(め)でたさや
つきの光のうつくしさ
阿娜(あだ)し女(め)のやさしさや
たまの帶のまぐはしさ
また花つけし檬菓樹(まんごーじゅ)の
麗しさをこの春は呈(よ)す

四

美女(くはしめ)の胡瓜(ヒムバ)(八)の雌はべに花の
紅(くれなゐ)そめし羅裳(うすもの)にてよそはれ

奈丸は泊芙蘭の黄いろなす
彩衣にて着飾はる

五

あだしめの
耳に似合へるあたらしき牙皂(一〇三)
また揺めく烏羽玉の曲髪には
無憂華と綻びし八重素馨の花
優しくうつくしきさまを成す

（一〇三）karṇikāra（牙皂）は學名を Pterospermum acerifolium といふ。

六

愛神(一〇六)にこゝろを惱まされたる
胙うつくしき婬女のちぶさに
白き梅檀もて潤へる珠の瓔珞
腕に手纏うでわ腰に飾帶つく

七

麗女の花印つけたる(一〇四)
金蓮にまがふかほに
たまのほとり眞珠の
つきしが如く美しき
汗たぎち播りをなす

（一〇四）stanântare（奶房のほとりに）ともあり。

八

いまやひもときて(一〇五)

愛神に滿てる身を（一〇〇）
あへがせる婬女は
側なるいとしをに
あくがれまどへり

（一〇五）slatha-bandhana（紐ときて）を「筋肉ゆるみて」ともよむ。

九

愛神は阿娜女の現身を（一〇六）
かぼそく白くものうく
ともすれば欠がちにし
また艶もてなまめかす

一〇

たをやめの
醉ひてものうき目に搖らに
ほゝには白く奶房にかたく
腰にほそく脁には脹よかに
いまや愛神は千々にやどる（一〇七）

一一

愛神は阿娜女のうつしみを（九一）
ねむけにて物うくなまめかし
言葉を聊かの酒に喋々しくし
また眼ざしを顰もて陂にせり

一二

なまめける

醉ひてもの憂きよろしめは
プリヤング(八七)鬱金さふらんの
色つけし麝香いりの梅檀を
かゞやかしき奶ぶさにぬる

一三

ゑひしれて現身ものうき人は
おもたきころもを疾くすてゝ
薫りよき伽羅のかにほへる
くれなゐ染めしうすぎぬ裝ふ

一四

こひこがれて羽毛をよだたせ
檬菓のつゆの美酒に醉心なる

ほとゝぎすは愛妻にくちつけ
蓮によりて呟けるこの蜂も亦
つまに嬉しきむつごとをなす

一五

あかき芽房もてしだれ
花咲きて枝うつくしく
風にゆらるゝ檬菓樹は
麗女の心いとゞ憬らす

一六

ねもとより
珊瑚の色の朱なす英つけ
芽ざしたる無憂樹(アショーカ七八)みては

若人のこゝろ有憂となる

一七

ゐひ心なる蜂に
美しき花いらなく吻つけせられ
栗なる芽そよ風にゆられ撓める
ひもときしばかりの蔓草をみて（一〇六）
こひするをとこは胸にわりなき
あこがれを起す

（一〇六）bālātimukta-latikāḥ とあるに據る。

一八

（一一）いとしきひとよ
好女のくちの麗色にも似て咲きいでし

リッ・サンハーラ

千日紅の花毬のいみじき美しさ見ては
いづれの身にしみやすき現しごゝろか
愛神の矢のさくなだりに惱まされざる（一〇〇）

一九

はる立つや日々にいづこも
燃上れる炎めき風にゆられ
華もてしだれし紫鉢の林に
おほはれたる此のおほ地は
紅衣裝ひし花嫁の如く赫ふ

二〇

美女に泥める若人の心は
鸚鵡の顏色なせる紫鉢に

いかでかやぶられざらむ
げにカルニカーラ(一〇三)の花に
いかでかこがされざらむ
其れをさらに此の杜鵑は
怡悅(うちぐは)しき囀りもて彌(いや)ます

二一

さへづり優しく羽毛(はね)よだてし杜鵑と
醉ひて和(なご)しき言葉つぶやける蜂とに
おもはゆく愼(つゝま)しきにひ妻のこゝろは
嫦家(おもや)にるてさへ(一〇七)刹那(さま)にかきみださる

（一〇七）kula-gṛha は「尊貴の家」ともよめど玆にては「家族の家」とよみ、夫婦の寢る家に對する家族の集ふ家すなはち sayyā-gṛha（閨屋）に對する guru-gṛha（嫦家）と同一のものと見て「おもや」と譯したり（註五五・參照）。

二二

はるたつや
霜降(おり)すなりて心地よき風は
はな咲きし香樣菓(サハカーラ)(一〇八)の枝をゆり
四方(よも)に杜鵑の囀りひろごらし
ひと心うばひ去りつゝ吹亙る

（一〇八）sahā-kāra は花の香ことによき樣菓の一種なり。

二三

なまめかしき新妻(にひづま)の笑(ゑみ)にも似てしろき(七九)
素馨もてかゞやけるうつくしき林園(その)は
ぼんなう斷ぜし聖者の心すらうばふを
戀に濁りしわかうどの情はなほさらに

二四

はるたつや
金帶まとひ眞珠の瓔珞むねにつけ
愛神の慢(一〇〇)にほそ身しどなき婦女は
うらぐはしき杜鵑や蜂のねと共に
をとこのこゝろを此上無くうばふ

二五

裾野とり〴〵に美しき花樹にてかざられ
をのへは羽毛よだてる杜鵑のこゑにみち
疊なる岩の面こけの羅網につゝまれたる
山ながめては人なべて醉ひごゝちとなる

二六

妻離れて思なやめる旅人は
花さきし香檬菓の樹をみて
まなこを閉ぢ泣きかなしみ
鼻を手障へていたくさけぶ

二七

麗しき春は
ゑひ心なる蜂や杜鵑のねと
花咲きし香檬菓(一〇八)や牙皂(一〇三)もて
いとするどき征矢のごとく
愛神(一〇九)のそゝりにすねし女の
むねを刺す

（一〇九）これは嫉妬せる妻が春の景物を見聞きして夫とそむねを刺す

の情婦との色合ひを想ひて瞋恚するを云へるなり。

二八

うつくしき檬菓のはなのよき矢と
蜂のむれの弦かけしいみじき紫鉚の弓を携へ
月を白無垢の天蓋マラヤ(一一〇)の風を猛れる象とし
杜鵑の伶人を引具し地を順はし春ともなへる
この愛神(一一一)はおんみらに幸を與へよ

（一一〇）Malaya は Malabar の西にある山脈の名なり。而してこの山地には栴檀の樹多く、ためにマラヤの風は香しと云はる。

（一一一）Vi-tanu は「無軀」の意にして愛の神 Kama の異名なり。

（完）

昭和九年七月七日に英彦山にて此の梵詩を譯しはじめ同十年八月二十五日に東油山にて稿を了へたり。

冬七及註八五（第十一輯四三頁上段）修正

七

ほの〳〵明けにたをやめの
奶房ふくよかなる胸の邊の
うるはしき肌にさしよりて
その刮にやるせなさ催せる
(八五)冬はくさの葉ずるにやどる
露を滴てゝ泣くにも似たり

（八五）冬を男になぞらへたり（夏九・參照）。而して斯かる際には女の泣くが妥當なるに此の句はそれと異なり。

譯字の修正

(イ)夏五。雨一八・一九。秋一八・二〇。冬五・一四・一六の「嬌女」はいづれも「娵女」と修正す。

(ロ)夏四・五・六。雨二五。秋三・二〇。冬三・四の「腰」はいづれも「脽」と修正す、すなはち「しり」なり。而して同じ句のうちに腰といふ字と共にあるとき以外は脽を假りに「こし」とも讀みたまへ、なほ云ふ和語の「こし」はときに脽にも通ずるを。

(ハ)夏九。雨二〇。冬一八の「わかしめ」はいづれも「わかきめ」と修正す。

第十輯所載「リツ・サンハーラ」修正及正誤追加

(頁)	(段)	(行)	(修正)
七〇	上	九	「このなつは來ぬ」
同	下	六	「夏をり〳〵に人の怡逸となる」
七一	上	一一	「たをやめは愛人のほてりを鎭む」
七二	上	一一	「ねむり果てしかとばかり愛神は いまや目ざむ」
七二	下	三	「いま有明恥らへる樣に色さむ」
七六	下	六	「火はいやまして燃出でしげに」
同	同	七	「樹々のうつろに金色と閃めき」
七九	下	一四	「ふしどにしかといだきしむ」
八一	下	一一	「脂の坡邊にかき垂れしかみ」
同	同	一五	「婀女は愛人の嬉しさそゝる」
八三	上	五	「その心こそ奪はるめれ」

(誤)	(正)
七一 上 一三 腰の	脂の
七五 上 一二 なぎき	ながき

リツ・サンハーラ

(頁)	(段)	(行)	(修正)
七五	下	六	渦れし 涸れし
七六	上	一一	藪の 藪や
七九	下	一二	慓かされし 慄かされし
八〇	上	三	眸のつゆ 目のつゆ

第十一輯所載「リツ・サンハーラ」修正及正誤

(頁)	(段)	(行)	(修正)
三五	下	六	「また園生はそけいに眞白にぞせらるゝ」
三六	上	一四	「玉まきの蓮みちたる邊の池塘とは」
三七	上	三	「世づきし少女に似て日ごと生長る」
同	上	八	「はすの花のこにて色そめなしゝ川は」
三九	下	一二	「愛女はいとふさやかなる烏羽玉の」
四〇	上	七	「また音も優しき玉まきの踝飾を」
同	下	二	「あきたつや」
四一	上	七	「うつくしき秋立つひかりは」
同	下	一一	「この冬は來ぬ」
四三	上	四	「慌びえて幸はふ若き女は」
同	同	六	「くちびる憶ひて高笑まず」

四四	下	八	「鏡を手にせるある郎女は」			三七	下	九	Erythria	Erythrina
同	同	一〇	「また愛人に津液すはれて」			三八	下	四	kuṭaja	kuṭaja
四五	上	一〇	「ほそ身しなやげる或る若き女は」			四二	下	四	あしがさり	あしかざり
同	下	四	「こき垂れしめでたき烏羽玉の」			四四	上	五	いろざむ	いろさむ
同	同	六	「愛人に樂しまれし身を眺めて」			同	同	六	priyangu	priyaṅgu
			（誤）	（正）		四五	下	八	sobhā	sōbhā
						同	同	一三	ほとり	あたり
三六	上	三	kālapa	kalāpa						